特250
599

祝光

本山成田山本堂

始

寺250
599

不動尊御眞言

南莫三滿多
縛日羅赦
戰拏魔訶路灑拏
娑匣叱也吽恒羅叱憾漫

御眞言の唱へ方

○不動尊御參詣の方々は最初に不動尊の御威德を說かれた佛說聖不動經を唱へ終つて不動尊御眞言を奉誦致すのが順序であります。

○この不動尊御眞言の大意はすべての障害難難を調伏して煩惱の繫縛より解脫せしめる御不動樣に歸命し上ると云ふ事であります。

○不動尊御眞言の唱へ方は切らずに一息にお唱へして、その回數は普通、七遍、廿一遍、百八遍、千八十遍等であります。

佛說聖不動經

爾時大會　有一明王　是大明王　有大威力
大悲德故　現靑黑形　大定德故　座金剛石
大智慧故　現大火焰　執大智劍　害食瞋癡
持三昧索　縛難伏者　無相法身　虛空同體
無其住處　但住衆生　心相之中　衆生意想
各各不同　隨衆生意　而作利益　所求圓滿
爾時大會　聞說是經　皆大歡喜　信受奉行
佛說聖不動經

成田圖書館

南無三十六童子

矜迦羅童子　制吒迦童子　不動慧童子　光網勝童子

無垢光童子　計子儞童子　智慧憧童子　質多羅童子

召請光童子　不思議童子　囉多羅童子　波羅波羅童子

伊醯羅童子　師子光童子　師子慧童子　阿婆羅底童子

持堅婆童子　利車毗童子　法挾護童子　因陀羅童子

大光明童子　小光明童子　佛守護童子　法守護童子

僧守護童子　金剛護童子　虛空護童子　虛空藏童子

寶藏護童子　吉祥妙童子　戒光慧童子　妙空藏童子

普光王童子　善儞師童子　波利迦童子　烏婆計童子

聖無動尊屬　三十六童子　各領千萬童　本誓悲願故

十萬億惡鬼　[illegible]行人時　誦此童子名　皆悉退散去

恭敬禮拜者　不離於左右　當呼童子號　須臾得吉祥

南無八大童子　慧光童子　如影隨形護　獲得長壽益

指德童子　烏俱婆誐童子　慧喜童子　阿耨達多童子

制吒迦童子　清淨童子　矜迦羅童子

成田山不動明王略縁起

一、御國の守護

今より凡そ千余年前、高野山をお開きになられた弘法大師が、まだ御在生の時の天皇を、第五十二代嵯峨天皇と申し上げます。

嵯峨天皇は、弘法大師、橘逸勢と共に、日本の三筆と云はれて、非常に書道に、御堪能であらせられ、また詩文にも、お達しになられた、御聰明な、英主であらせられました。ここに、大師も、名筆のほまれ高く、入唐中大唐國の皇帝から、五筆和尚と云ふ名を、うけられたほどでありますから、これをお聞になられた、嵯峨天皇は、非常にお喜びになられ、ことのほか、大師を御信任遊ばされ、宮中に、お召し出しになり、信仰上のこと、書道のことなどに就て、親しく御下問あらせられたことも、しば〳〵でありました。

然るに嵯峨天皇御即位後間もなく、兵亂が起り、帝の御心を御煩はし奉る事になりました。それは、其の頃宮中に使へる藤原藥子といふ婦人がありました。此の婦人は嵯峨天皇の御兄君

で當時は太上天皇でありました、平城天皇の御恩寵を恃み、しば〳〵專横無道を行つて來ました。兵亂は、全たく、此の信仰心薄く、たゞ己れ一個の榮達のみを顧ひ、ひたすら、權勢と榮達のみを追ひ求める一妖女、藥子のためでありました。それ故、世に此の亂を、藥子の亂と云ひ傳へて居りますが、それは、次の如き、事情でありました。

× × × ×

平城天皇が、御病氣の故を以て、御位を御弟嵯峨天皇に、おゆづりになられて、まだ日も淺い、弘仁元年秋九月の事であつた。

平城天皇が、御位を、おゆづりになり、太上天皇とならせらるるや、身にあまる恩寵を傘にきて、時を得顔にふるまひ、あまつさへ聖明を、おほひたてまつるが如き行の、しば〳〵あつた藥子や、その兄、藤原仲成たちの權勢と榮達に燃える慾念も、はかなきものとなり、榮華の深酒に醉ふて、むさぼりふけつた野望の惡夢も、たちまち消え去つて、彼等は、つひに、失望の淵深く、突き落された。そして、此の失望は、何時しか、恐ろしい怨恨となり、さらに陰謀となつて、兵亂ののろしが上げらるるにいたりました。

今一度、上皇を、御位に登らしめ奉らう、それには、平城に遷つて、兵を擧げるよりほかに、道はない、と相謀つた藥子兄弟は、上皇を奉じて、平城の舊都へと、御車を遷した。

兵衛督藤原仲成、尚待藥子、上皇を奉じて、車駕を平城京へと、すゝめ參らせた、この飛報、

一たび都に傳はるや、平安京の空は、暗雲にこざされ、人心は戰の恐怖におののき、老幼婦女子は、戰火をおそれて、夜を日についで、都をのがれ去つた。

平城に走つた仲成、藥子は、藤原葛野麻呂、藤原眞雄等の同族の、眞心こめた諫言をも、一笑に附して、遂に、紀伊、大和の兵をつのり、東國に據らんとした。

然し、仲成等は、一個の私心を以て、至上に弓を引き、國法を亂す所の、逆賊であつた。神明、佛陀の照覽する所、彼等の運命は、すでに、まぬかるべくもなかつた。坂上田村麻呂の率ゆる官軍に攻められ、仲成は誅せられ、藥子は、進退谷まり、攻め來る軍兵の聲を聞きつゝ、几帳の中に、こぢこもり、藥を呑んで、つひに死にました。

× × × ×

かくて、兵亂は治まり、御代は再び、泰平に歸しました。然し英明に、わたらせらるる、嵯峨天皇の叡慮を、安じ奉ることは、出來ませんでした。天皇は、一時の兵亂の鎭定よりも、永遠の御國の安泰、國民の幸福を、御軫念あそばされました。如何にせば、是の如き兵禍を、再び繰返すが如き事なきを得べきか、おそれおほくも、日夜、おほみ心を、いたませられました。

かくて、ついに、天皇は、これを御信任厚き、弘法大師に、御下問遊ばされました。その時大師は、謹みて奏上せられました。

今陛下ノ御願ヲ滿サント欲スルニ、唯一無二ノ大聖在ス。號シテ大聖不動明王ト稱シ、慈怒ノ相ヲ現ジテ順逆ノ二機ニ應ズ。法令ヲ亂ス凶暴、善道ヲ破ル悪魔ハ國家ノ强賊ナリ。古今ノ聖主モ此逆徒ヲ伏セザレバ、治平ヲ致スコトヲ得ズ。然シテ此ノ障碍ヲ降伏セント欲セバ、不動明王ノ力ニ由ルニ非ザレバ、成就スルコト能ハズ。故ニ此尊ヲ三世諸佛ノ祖師、一切有情ノ所尊ト稱シ奉ル、陛下、國富ミ民豐カニ、王法四海ニ光被センコトヲ願ヒ給ハヾ、大聖不動明王ノ加持力ニ賴リ給ハンコトヲ乞ヒ願フ。

天皇は、このほか御感悅あらせられて、

朕ガ爲メニ速カニ不動明王ノ尊像ヲ刻シ、皇祚無窮鎭護國家ノ護摩法ヲ修セヨ。

この御沙汰を賜はりました。大師は、廣大なる大御心に深く感激し、靈木を選んで、親しく斧を振ひ、一刀三禮、不動明王の尊像を刻み、山城國高雄山神護國祚眞言寺に奉安し、玉体安穩、鎭護國家の護摩法を修し、御國の守護ゝせられました。

二、下總成田山へ御遷座

かくて、大師が彫刻開眼せる不動尊は、御國鎭護の御本尊として、高雄山に奉安せらるること凡そ百三十年、第六十一代朱雀天皇の天慶二年になり、相馬小次郎平將門が、關東の地に謀叛をなし、猿島郡の居城を、皇居にかたどり、自から、平親王と僭稱して、兵をつのり、遂に

亂を起しました。此の時、天皇は兵亂鎭定の帥をお遣はしになると共に、寛朝僧正に、天國の寶劍を賜はり、朝敵降伏の護摩法を修すべき旨、密勅をお下しになりました。

その時寛朝僧正は、大命をかしこみて、高雄山に奉安せられし、大聖不動明王を供奉しつつ、はる〴〵淀の流を下り、難波の津より船出して、海路はるかに東國にいたり、上總の國尾垂ケ濱より上陸し、さらにすゝみて下總の公津ケ原に地を選み、御本尊を安置して、三七二十一日間、朝敵降伏の護摩法を修せられました。あだかも天慶三年二月十四日、僧正護摩法結願の日、不思議や逆賊將門は、あはれ藤原秀郷の矢に左眼を射ぬかれて、馬より落ち、忽ち誅に伏しました。

兵亂すでに、おさまりて、僧正再び都に歸らんとせられし時、明王靈夢に示現なし、永く此の地にとゞまりて、有緣の衆生を救はんと、かしこくも、僧正に告げられました。かくて寛朝僧正は、茲に一宇を建立して、戰に新らたに勝ちたる靈驗にちなみ、新勝寺と名け、明王を奉安致しました。

此の時以來、嵯我天皇の御心に依り、大師が自ら刻まれし、靈像不動明王は、成田の地に安置せらるゝことゝなり、新義眞言宗智山派別格本山成田山新勝寺の御本尊となられました。

その後凡そ一千年、御本尊の靈德を蒙るものます〳〵多く、祐天上人、道譽上人、松平定信公、二宮尊德翁等は、そのよく世人に知られたる篤信者でありまして、今日は正に、全國に五百万の信徒ありと云はれて居ります。

香里別院新設

この樣に、全國に多數の信徒を有する爲め、各地方の信徒の希望に依つて、成田山の別院は、東京市深川、横濱市、札幌市、函館市、川越市等の全國各地に建立されて居りますが、今回は大阪市郊外香里の地に、新しく成田山別院が建立され、去る昭和九年十一月十五日より十八日迄四日間、盛大なる落慶入佛大法要が行はれ、連日數万の參詣者が出て、香里空前の大盛況でありました。

香里は（阪神電車にて、大阪より二十分、京都より四十分）大阪市を遙かに見渡し、青松は鬱蒼として、誠に清氣に滿ち、本尊不動明王を奉安するに、ふさはしき靈地であります。

此の地に、成田山別院を建てる事が、決定されたのは、昭和五年であるが、それ以來下總の本山を始め、一般信徒の熱烈なる信心の力に依つて、本堂、客殿、書院、庫裡等の壯麗なる建物の落成を見るにいたつたのであるが、これまた、偏へに御本尊明王の、御威德の然らしむる所で、その廣大甚深なる威神力を、今更の如く、深く感ぜしめられる次第であります。

境内めぐり

（境内圖參照）

友人から貰つた案内記を唯一のたよりにして、驛から軒毎に並んだ羊羹店や旅館の賑かな呼び聲の中を歩いて十五分もたゝない中に門前まで來た私は、今更の樣に伽藍の偉大さに驚いた。老杉生ひ繁る丘陵を後に中天に峙ゆる輪奐の美は、山頂に瞬く法燈と共に、洵靈地にふさはしい靜寂さと、平安と森嚴との裡に私達の心をひきつけます。

境内に入つて立擶ぶ石燈籠の間から左手に昔ながらの白い土塀を隔てゝ **本坊** が見えます。案内記に依れば **客殿** **奥殿** **内佛殿** **方丈** 等ありて、**奥殿** は畏くも明治十三年、十五年兩度の下總御料牧場行幸の御時、明治天皇の行在所にあてられ給ひし所にして、昭和八年聖蹟指定地とせらるゝとあります。手洗所から左の方へ行けば門を入つて謦欬受附所があります。手洗所で潔めて見事な御影石の石段を登りつめれば、高さ六丈三尺、間口十間四面の總欅造の **仁王門** がその上部に後藤魁之助の作なる、竹林の七賢人と司馬溫公瓶破り等の美事な彫刻を周ぐらし、天保二年照融上人再建の偉業を偲ばせ、左右の朱塗の仁王と後方の多聞天と廣目天との尊嚴なる御姿を拜し、仁王池の無數の龜の遊べるのを見て石橋

を渡れば、左方の突兀とした岩石上に **こゝわれ不動尊** があります。明治卅二年五月の造營で、幾度修覆するも忽ち破るゝを以てこゝわれ不動と名附けられたる、くしき緣を考へつゝも更に嫁しい石段を登つた處に **御本堂** があります。これぞ本尊不動明王を安置し奉る處で、本堂近く踏入るに隨つて次第に肅然たる心持になつて、思はず襟を合せました。法の光幽に瞬く所、遙かに御本尊の御姿を拜し、左右の矜迦羅、制多迦兩童子を始め奉り、別壇の大威德明王、金剛藥叉明王、軍荼利明王等の限りなき御靈光に光被せられし我が幸を感謝し御眞言を奉誦して廻廊に出ました。引きも切らぬ參詣人に又は、一心不亂に經文を誦へる白衣の行者に、さては何事か念じつゝ御百度を踏む信者の敬虔なる態度に、思はず足を止めて其の熱烈なる信仰に感じました。ふと廻廊欄間の彫刻に眼を移しました。自分の亡き身内の誰れかが必ず居るてふ五百羅漢中に、私はゆくりなくも祖父に彷彿たる一羅漢を見出したのでした。この五百羅漢は狩野一信の圖案にて松本良仙の刻とか、更に側の扉の二十四孝の彫刻は島村俊表の作とか、何れ何れとも云ひ難き見事なる鑿のあとを見、安政四年三月三日上棟式をあげ、同五年八月遷座式入佛供養の盛儀を擧行せし照嶽上人の苦心經營の跡を思ひつゝ、裏面に至れば、前面の岩石上に本尊明王の眷屬 **三十六童子** が安置されてありました。更に廻れば御供所と御身代り札賣場前に出ました。いたいけな我が子のために御身代を一枚頂いて本堂を出た。九丈餘の丹青の **三重の塔** は正德二年照範上人靈夢に感じて建立せしとか、文政四年五月市川團十郎寄進の間口九間一尺 奥行五間の **額堂** には所せまきまでに、額、繪馬等がかゝげられ、群居る千餘の親鳩、子鳩は御堂の屋根より屋根へと飛び廻り、あるひは參詣客の肩に、

手に止つて餌を求めて居りました。額堂の側に方六間の朱塗の建物があります。**一切經藏**と云つて中央の輪藏に一切經六千九百三十卷を納め八面にして、且よく廻轉し、若し一度この輪藏を廻さば、中の一切經全部を通讀せる功德ありと傳へられ、今しも信者の四五人が力を合せて輪藏を廻して居りました。堂中に大きな家の樣なものがくる〳〵と廻る樣に、奇意の思ひをして暫く見て居りました。役僧の說明に依れば享保八年三月照範上人の建立にして、正面の一切經藏の額は松平定信筆との事、丁度直近く前面の**鐘樓**より打出す鐘に、鐘に起き、鐘に眠る此の土地の人々の生活を偲びました。案內記には高さ六十尺四間四面、寶永三年照範上人造營、樓上巨鐘は慶應三年に再鑄したるものと記されてあります。この鐘樓の下の石段を俗に女坂と云ひ、坂の下には有名な**水行場**（俗に斷食堂）があります。三七日間、食を斷ち、水をかむり、ひたすらに御眞言をとなへ、本尊に祈願する處で。祐天上人や、二宮尊德先生や、桂川力造などの故事が想出されます。鐘にせかれたのでもありませんが、急いで本堂側の石段を登りました。こゝが本山の頂上であたりはこんもりとした杉木立に覆はれて居ります。先づ目につく朱塗の御堂は**光明堂**と云つて元祿十四年造營せられし舊本堂を、安政四年の本堂改築の時、此處に引きあげ大日如來を安置し奉り、更に其の裏手の岩石重疊せる所に至れば、そこには一つの洞窟がありました。窟の奥深く微に燈火が輝いて居りました。したゝる雫にも消えやらで久遠に輝く光の樣にも思はれて、思はず合掌致しました。こゝは**奥の院**といつて大日如來を奉安してある所です。奥の院より左に出れば直ぐ正面に**第二の額堂**があります。それを通つてかなたの森の中へ通ずる敷石の道を一町程行つた處に

吒枳尼天があります。俗に**出世稻荷**と云つて、諸藝人、花柳界の信者が多く、その先には成田山六大事業の一なる少年教護の**成田學園**が見ます。光明堂から第二額堂へ右折して數多の賣店の前を**成田山公園**へと進むにつれて、淙々たる瀧の音が次第に耳に響いて參ります。賣店のつきた所から右に石段を下ると、あたりは已に鬱蒼たる樹木につゝまれて、膚寒く感ずる身に一層瀧の音が聞えて、やがて前面の岩石より落下する男瀧が見えます。丁度側の洗心堂から出た白衣の行者が瀧に打たれながらも兩手をしつかと印に結んで一心に荒行して居りました。男瀧は更に女瀧の流を集めて急湍となり、第一の池の方へと巖を嚙んで流れて行きます。流に沿ふて進むにやがて急に眼界が開け、一面の芝草の中の噴水と、かなたに白堊の樓閣が眼にうつります。**新更會館**です。やはり成田山六大事業の一つで、社會教育を目的とし特に成人教育と青年教育とに力を注ぎ、內部には幾多の鄕土史料が集輯されて居ります。十年に涉る歲月と幾十万の財と十數万の人力とを費し、加ふるに自然の森林美と人工美とを巧に調和させた、五万坪のこの公園は春は花、秋は紅葉の眺め美しく洵に、日本の三大名園たる四國の栗林公園、金澤の兼六公園、備前の後樂園の粹を集めた趣をそなへて居ります。第二、第三の池の鯉魚の數に驚きつゝ更に東の台地に登れば遠く整然たる田園を眺め、眼下に**成田中學校、成田女學校、**その側に藏書十万冊を越ゆる**成田圖書館**を見る事が出來ます。そして更にその下にある町を離て、彼方の高台に**幼稚園**を瞥見されます。何れも成田山の經營にかゝるものです。さうかうして居る裡に、道は梅の老樹の間を通り、何つしか元の光明堂の處へ出て參りました。

お答

先日、大阪地方の人から、お不動様に、お參詣すれば、淨土宗や眞宗の御檀家の人々は、その御檀家を離れて、不動様の御檀家にならなければならないでせうか、淨土宗や眞宗の檀家の人は、お不動様を、お參詣することは、出來ないでせうか、

と云ふ質問を受けましたが、決して、その様なことはありません。

如何なる宗派に屬する人に對しても、お不動様は、みな一視同仁に、御覽なされます、決して差別を致しません、ですから、不動經の中に、「衆生の意想各々不同なれば、衆生の意に隨て、而も利益を作し、求める所を圓滿せしめたまふ」とあります。衆生の至誠不動の信心が、御本尊明王の、不動三昧の御本誓に通ずるならば、所願滿足することが出來るので、宗派の相違などは問題ではありません。若し信心不動の誠心を盡せば、如何なる人と雖も、不動明王の加被力を蒙ることが出來るのであります。

こんな、疑問を、お持ちに、ならるる方もあると存じますので、一寸と、一言申し上げます。

護摩法 とは五穀を始め草木百花を法に依て調和し、之を聖火にて焚き、本尊に供養し、本尊の加被力と、行者の信力と加持渉入せしめ、諸願成就にいたらしむるの法であります。

朝護摩 と稱して、本山成田山に於ては、毎朝、曉天の星を踏んで、山主僧正一山の僧侶を從へ、護摩法を修し、玉体安穩、五穀豐饒、万民豐樂の祈願をなすのが年中行事となつて居ります。

その他一般信者の願に依り、隨時に、平護摩、大護摩等をも行ひます。

坊入 とは、講社員、又は一般信者の參詣して護摩修行をなし、終つてから、新勝寺本坊客殿にて、御本尊の御神酒を受くることを云ふのであります。

節分會 とは、節分の夜、新勝寺御本堂、御本尊寶前に於て、山主僧正大護摩修行中に行はるる豆撒きの御法事を云ふのでありまして、當夜午前二時頃に打出す梵鐘と共に、山主僧正一山の衆僧を從へて昇堂、護摩法を修せられるや、これに從つて、年男、役僧等おしよせる數万の參拜者に向つて、福豆、福守を撒くのですが、實に此の日一日の參拜者は毎年十万を越えて居ります。

信仰實話

戰場の神秘

母に貰つたお守札

チチハルにて廿四日森特派員

撃つものも、撃たれるものも、たゞ一つの命を的の戰鬪には人智を超えた神秘が現はれることは珍しからぬことではあるが、去る十八日チチハル附近において一兵卒が敵彈を背後から腹部にうけながら命を助つた裏面に成田不動尊のお守札があつたことは奇蹟をこえた神の加護として戰友の話談となつてゐるエピソートである。

朝鮮龍山の騎兵第二十八聯隊は渡滿以來實に七回の戰鬪を經てその武名は全軍に響いていたが、去る十八日戰鬪に勝利を得たわが軍の先發偵察隊として出發、敵狀偵察の任務についた騎兵第二中隊は澁谷大尉に率ゐられて後續の歩兵聯隊をあとに遙に馬上疾驅して同夜六時ごろ、薄暮の高原を馬蹄の響き高くチチハル南方約一里の寒村大興屯に入つた。

折から傳令が馬を飛ばして

わが砲兵隊が約三門、彈藥車三輛を率ゐてこの岡をチチハル方面に前進してゐます

との報告だ。砲兵が出動したのなら、それと合しようといふので鞍をはづす暇もなく更に轡を並べて前進した。砲兵隊は今や岡の低地を車輛の音高く前進して行く。ポンヤリした月影をすかして兩手を馬上にかざせば、こはいかに、

わが軍にはあらずして昂々溪方面戰鬪に猛威を振つた敵の野砲隊ではないか。澁谷中隊長は全員に命を下して駒の蹄の音をひそませて偵察すれば、早くもわが軍の影を認めて敵は再び丘地を占めて砲門を向けんとする危機一發といふ有樣ではないが。澁谷大尉は手綱をグット引締め駒のたてがみを寒風になびかすと見る間に秋水一閃

攻めよれッ！襲歩ッ！

と命令一下、全員一齊嵐の如き喊聲と怒濤の如き鐵蹄の響きとを以て敵の砲車も碎けよと壯烈な騎兵の襲撃を開始した。

たゞ見る無限の曠野の宵闇に閃くは劍光、大地を淡く照らす宵の月影を滿身にうけて二個中隊のまつたゞ中に人馬もろ共、木葉みじんになれよと飛込んだ。この巨大な、肉彈の驀進で敵の砲兵は狼狽しながらも流石は黑龍江省軍精鋭を誇る馬賊上りの砲兵隊ピストルを雨霰と撃ち出したが、われは數度の戰火に場數を踏んだ一騎當千の猛者揃ひ、右手に血刀左手に手綱、馬上鬱かに乘廻して人馬一體の阿修羅とあばれ奮戰決鬪數十分散らしては斬り集めては刺し遂に一個中隊足らずの小人數で敵兵二個中隊一人殘らず斃し、敵の精鋭なる七ミリ口徑の野砲三門彈藥資料をそつくり手裡に收め蒙古の高原も裂けよと大音聲で凱歌をあげた。このとき第二中隊附の片岡一等兵は軍刀を以て斬り落した一敵兵が倒れ落ちながら狙撃したピストルの彈丸を背中にくらつて、危く落馬せんとしたが馬首を寄せた戰友に援けられ、更に赤十字の手に收容された。軍醫が傷口を調べてみると、不思議や五尺と離れぬ近距離から狙撃されたのに拘らず背に彈丸の傷口はあるが右肺下部を貫通した形跡がない。いぶかつて軍醫が胸を開けば奇蹟とも神秘とも右肺下から入つた彈丸は胸もと深く收めたお守袋のまん中を貫き成田不動尊の木製お守のまつたゞ中に彈丸の跡を染めたまゝで留まつてをり、彈丸は切開いた胸先からコロリと落ちて傷口は小さく彈丸の這入つた口と變らない、軍醫も驚いたが片岡一等兵も驚いた。まさに神明の加護である。若し彈丸にしてお守り札に當つて留つてゐなかつたとせんか、片岡一等兵は胸部貫通銃創で命は無かつたと軍醫は恐怖に近い神秘さを語つてゐる。このお守り札こそは片岡一等兵が朝鮮出發の際、澤山の知人から送られたものを凡て一袋の中に入れたが、肌身離さず持つて居たその成田不動尊のお守札である、家代々の守護神として入營の際母から贈られたものであつた。この奇蹟は隊中誰知らぬものもないほど神秘な事實として語り傳へられてゐたが、同中隊の杉野主計大尉は記者に語る。

片岡一等兵の奇蹟は隊中の不思議で、實戰に臨んでは彼の人物を思出さないが、戰ひすんで考へると實に神秘だと思ふ。私の刀をみて下さい。この通り刀身は曲り、刃はこぼれてしまつて

ゐます。それほど敵の砲兵は頑強に抵抗しました。敵は黒軍の最精鋭と誇る砲兵隊だけに射撃は實に上手で、落ちても倒れ伏すまではピストルを撃ち續けました。僅か一個中隊足らずの騎兵で二個中隊に餘る砲兵隊を完全に粉碎したことも不思議ですが、片岡一等兵がお守札のおかげで生命を拾つたことは更に神秘と全員一同神明の加護を念じてゐます。

（滿洲日報昭和六年十一月）

× × ×

彈雨の中から

滿洲派遣混成第四旅團
歩兵第三十一聯隊第二大隊
機關銃中隊　歩兵軍曹
田村武夫

成田山宮司殿

謹みて御手紙を差上げます。幾百里と離れた戰地より御願申上げます。何卒恐れ入りますが神様の御前に御禮を申上げて戴き度う御座います。

私儀成田山の御守りを四國のある方より戴き肌守りにいたして居りました。圖らずも二月十一日の戰中に餘りにも御加護の有りがたきを知り御禮を申上ぐる所で御座います。

いつも袋に入れて腰に下げている御守で御座いました。激しい戰中敵彈は盛に自分の附近に落下します。機關銃で御座います。敵は盛に狙撃し全く雨霰の樣に銃側に落ち頭も上げ得られん位で御座いました。然し一發の彈丸も中りません。眞に不思議の位で御座いました。そして完全に敵を撃退しました。負傷者も二名出しました。僅か一時間餘の戰中では御座いましたが然し私に中らぬ。而も私の銃にゐる銃手八名が全部無事で御座いました。

戰濟んで後から氣がつき隨分撃たれたなとホット一息し腰の御守りを見たら、どうでせう、眞二つに割れて居るではありませんか。

餘りにも不思議な靈驗に僕は思はず帽子を取りました。

自分を加護して下すつたのだ神様がと深く〳〵感謝せずには居られませんでした。今迄もたくさんあつた事で御座いませう此不思議

が私は何と御禮申上げてよいやら判りませんでした。

早速取るものも取りあへず御禮を申上げます。何卒神様の前へよろしく御願申します。今は戰線で爲替くむ局も御座いません。戰雲定つてから改めて御神體の御守りを戴きます。

何卒宜しく御願します。先は右御禮まで申上げます。

昭和七年二月十五日

× × ×

御靈驗のここども

茨城縣稻敷郡阿波村大字四箇
木内峯太郎
萬延元年十二月二十七日生

一心に不動明王念ずれば
如何なる事かかなはざるらん
ありがたや明王様の御情けで
長らう命七十三なり

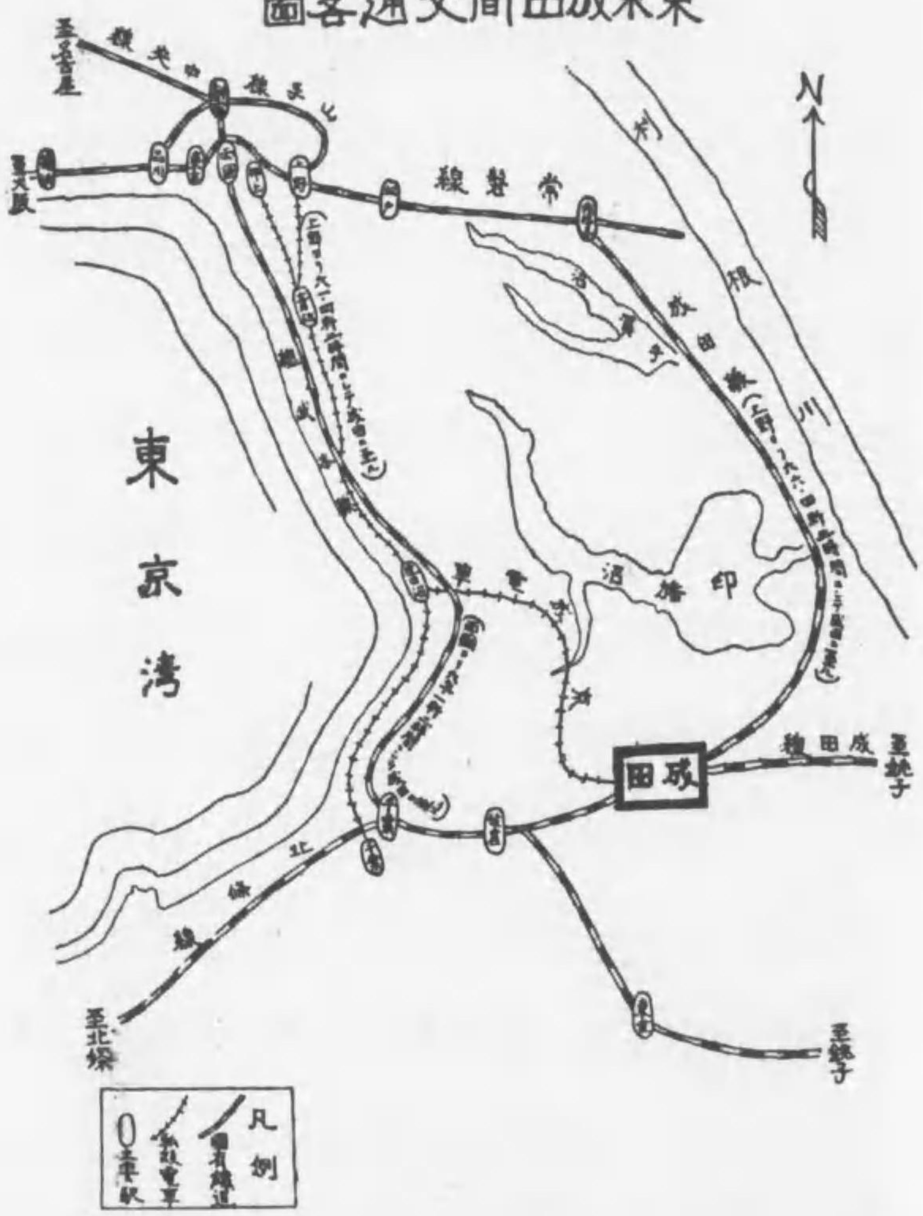
謹み、敬うて、成田山御本尊大日大聖不動明王、南無三十六童子様の御利益顯著なる事を、今我茲に恐れ謹み申す。

私儀明治十七年廿五才の時二月の或日麥畑に肥料を施行致し居り候處、天候俄かに一變して次第に險惡に相成り、終には大吹雪となりて咫尺も辨ぜざる困難に際會して、十五六町の道を急ぎて我家に歸り、衣服をぬぎすて、服を着換へて焚火して身體を煖め、漸く本身に相成候處、其の翌日には大熱を出し手足に激痛を覺え、如何とも仕難く醫師を招き手當を加へ候も、更に其効なく遂にリウマチスと相成り起居する事能はず寢俯したるまゝ、三十餘日間病床に呻吟致し居り候。

其時、我は一心に御本尊大日大聖不動明王様に、當病平癒の祈願を發し寢俯して居乍ら、二週間の間午前中は火の物を斷ちて信心致し居り候處、我が願を哀愍受納し給ひて、果せる哉、滿願當夜十二時頃——御本尊様御出現ましまして、我が足の痛みにて屈め居りしを、引きちぎれんばかりに引伸し、餘りの强力に我は思はず叫びをあげしに夢は覺めたりき。驚き集りし家人と共に足部を見しに、不思議や足は伸び居たり。屈むる事は如何にと案じ、そろり〳〵と屈めたるに少しも疼痛もなく、次第に屈伸自由に相成り、其後は日毎に

361
530

東京成田間交通略圖



快方に向ひ、後三週間にてさしもの難病も全治致し候。

是偏に大慈大悲の不動明王様の御靈驗のしからしむる所と感激致し、其後は毎月御縁日廿八日は午前中は火物斷ちを致し、信仰致し居り候。越えて明治廿七年拙者の令弟病氣にて死去致し、實妹の寡婦となり其時五才の一子ありて、生活上これを案じたるため心臓病を起し、醫師の治療を受けたるも其の効なく、依つて意を決し拾七日間斷食をなし、一心不亂に御本尊不動明王様に祈願仕りたる處、忽にして病氣全快致したり。仍而其の赫々たる御威德と、言語に盡し難き御法恩に感泣して、其後は御恩禮として斷食斷ちて拾五日間或は御本堂を廻りて參拜する事壹千度、茲に我本年七拾三才なれ共身體健康なるにつき、毎月月參りする事今日まで五拾年間に及べり。

又五年前よりは毎朝座禪法を以て不動經、般若心經を讀誦仕り、以て御本尊に御禮申上候處、更に更に健康と相成候。

茲に謹みて御靈德の一半を記す次第に御座候。

◉成田山經營事業

成田學園　明治十九年十一月二十八日創立
成田中學校　明治三十一年十月七日創立
成田圖書館　明治三十五年二月一日創立
成田幼稚園　明治三十八年五月二十四日創立
成田高等女學校　明治四十四年二月十三日創立
新更會　昭和三年六月五日創立
成田山公園　昭和三年十月完成

昭和九年十二月三十日印刷　昭和十年一月一日發行（定價金三錢）
千葉縣印旛郡成田町一番地
編輯兼發行人　神崎照嘉
千葉縣印旛郡成田町四〇二番地
印刷人　大友惟誠
印刷所　成田學園印刷部
千葉縣印旛郡成田町一番地
發行所　新更會刊行部

終

成田山境内畧圖